



地獄の門 1900年

ロダン「地獄の門」

「地獄の門」は、恐怖と不安と情熱のなかに、騒ぎたち、荒れ狂う、生命の一大旋風である。しかし、これはまた、この作者であるロダン自身の芸術的混乱と苦悩の姿であったともいえよう。」菊池一雄『ロダン』一九六八年

「地獄の門」は、一九一七年の死まで制作が続けられた、ロダンの不滅の大作である。セーヌ川左岸に、チュイルリー公園とむかいあって建築されることになった装飾美術館の入口の壮大な扉のために、一八八〇年フランス政府は正式にロダンに制作を依頼した。ロダンはただちにデッサンとテラコッタの試作を始めた。ルネサンスの巨匠ギベルティが作った、フィレンツェ本寺の洗礼堂の扉「天国の門」にならない、ダンテの『神曲』「地獄篇」の、八つの環にもとづく規則正しいパネルをもった構成から出発した。しかし、その構想はしだいに壮大となり、ダンテの『神曲』にボードレールの憂悶が加わり、「地獄篇」と『悪の華』の混沌のなかから、世紀末のロダンの人間観が独特のフォルムをとってあらわれてきた。

「地獄の門」は一九〇〇年のパリ万国博覧会のさい一応まとまった形で発表された。右の写真がそれであるが、このブロンズの門の高さは六・一五メートル、幅三・九〇メートル、一つの欄間と二枚の扉よりなる単純な構造からなり、この巨大な空間は総数一八六にも達する人体で隙間もなく埋められた。門の頂上には三人の沈鬱な黙想的な人物が俯せた顔を接しあい、肩を曲げ、三本の腕を集めて直下を指ししめす。いずれ自分らも墮ち行く地獄の人々の群に恐れおののきつつ。その三本の腕が差し出す直下には、たくましい裸体の「考える人」がうづくまる。その足下を、抱き合って墮ちて行くのは、パオロとフランチェスカである。さらにその下には地獄の苦熱に涯しなく叫喚する無数の群衆がいる。ロダンの「地獄の門」は、まさに二〇世紀を表象する彫刻となったのである。